

# 自己の学びへの責任が主体的学習の連鎖を生み出す — 英語 Active e-Learning の実践からの示唆 —

稲葉みどり

愛知教育大学日本語教育講座

## *How to Make English E-learning More Effective: Offering Opportunities for Personal Goal Setting, Self-assessment and Reflections*

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 要 約

英語の e-Learning では、学習者がより効果的にプログラムを活用し、主体的に学習に取り組み、能動的に学習活動を進められるようにすることが重要である。それには、どのような方策が有効かを探るために、筆者は、平成 28 年度後期に大学 1 年生を対象として、e-Learning を取り入れた授業を実践した。授業は受講生が自分に合った学習目標を立てて英語 e-Learning を行うことを主眼とした。稲葉(2017)では、受講生が当該の e-Learning の授業にどのように取り組んだかについて、受講生の学習記録の分析から明らかにした。そこで、本研究では、当該の e-Learning が英語学習上、受講生にどのような教育的効果をもたらしたかを考察した。そして、学習記録の更なる分析の結果から、以下のような示唆を得た。①自分の英語の弱点を発見し、問題点を明確にする契機となった。②英語の上達に必要な学習内容を洗い出し、具体的に提示することを促した。③自分に適した学習目標・課題を設定する手助けとなった。④目標達成のための学習方略を考える後押しとなった。⑤上達や学習成果を把握・実感するのに役立った。⑥学習意欲を高めることに繋がった。⑦学習記録が省察を深めると機会となった。そして、自己の学びに責任をもって取り組むことが、主体的学習の連鎖を生み出すのではないかという示唆を得た。ただし、これは本実践のみから得られた知見であり、今後さらに実践を積み重ねて検討していく必要がある。

Keywords : 英語 e-Learning, 目標設定, 学習方略, 省察, 学習記録

### I 研究の目的と背景

英語の e-Learning では、学習者がより効果的にプログラムを活用し、主体的に学習に取り組み、能動的に学習活動を進められるようにすることが重要である。それには、どのような方策が有効かを探るために、筆者は、平成 28 年度後期に大学 1 年生を対象として、e-Learning を取り入れた授業を実践した。当該の授業には、e ラーニングシステム ALC NetAcademy NEXT (アルク教育社 2016 年リリース) の総合英語トレーニング・初級コースを導入して行い、受講生が英語力の向上のためにどのように活用したら良いかを考え、自分の目標を設定して学習を進めた。受講生は、授業毎に学習記録を書き、自己の学習を省察した。

稲葉(2017)では、受講生が当該の e-Learning の授業にどのように取り組んだかを分析した結果、自分に益のある目標を設定したこと、自分なりの練習法やストラテジーを用いて学習したこと、上達を意識して練習

したこと等が明らかになった。また、当該のプログラムの有効な活用法を考えることにより、意味のある学習が創り出され、主体的、能動的、自律的に学習に取り組む姿勢が育まれたことが示唆された。

そこで、本研究では、更なる分析により、当該の e-Learning の授業が英語学習上、受講生にどのような教育的効果をもたらしたかを考察する。

### II 実践の概要

#### 1. 授業の形態

この授業は、教師の管理下で一斉授業の形態で行う e-Learning である。プログラムは、ALC NetAcademy NEXT・初級コース(アルク)のプログラムを採用した。受講生は、教育学部現代学芸課程の 1 年生 17 名、3 年生 6 名、科目等履修生 1 名、合計 24 名である。

本実践では、受講生がプログラムの特徴を把握した上で、自分の英語力の向上のためにどう活用したらよ

いかを考え、具体的な目標を設定して学習を進める形態をとった。受講生は授業毎に各自の学習目標を設定して学習を行った。そして、学習記録にその日の学習目標、学習ユニット、目標達成度、成果、課題、感想等を書き、自己の学習の省察を行った。

授業は、オリエンテーション、プログラムの説明・操作練習等、プログラムを把握するための自由学習(3回)、目標を設定して進める目標設定学習(7回)、レシテーション(発表)とピア・フィードバック 3回の全15回で構成した。レシテーションは、モデルの発音を規範として、自分の話しやすい速さ、音声、声色、身振り等で内容を効果的に伝えることを目標とした。授業の詳細は、稲葉(2017)参照。

## 2. ALC NetAcademy NEXT の概要

ALC NetAcademy NEXT・初級コース(アルク)は、リスニング&スピーキング、リーディング&ライティング、文法のそれぞれのサブコース、及び、実力テストで構成されるe-Learning 教材である。学習開始レベルは、TOEICで350点、目標到達が500点を目安としている。当該の授業では、リスニング&スピーキングコースを中心に学習を進めた。

リスニングコースの学習内容は、6段階から構成されている。STEP01 は音声を聞いて設問に答える練習問題、STEP02 は語彙フラッシュカードによる重要語句の学習、STEP03 は語彙が定着しているかを確認する語彙ドリル、STEP04 は意味の固まりで区切られた音声を聞いて英文を頭から理解するスラッシュ・リスニング、STEP05 は STEP01 より速い音声を聞いて英語のスピードに慣れるスピード・リスニング、STEP06 は、読み上げられた英文をすべて入力するディクテーションである。

スピーキングコースの学習内容は、3段階から構成されている。STEP01 は、リスニング学習ユニットでインプットした英文を声に出す練習をするリピーティングで、音声を録音してお手本と比べることができる。STEP02 は、学習した英文(全文)を声に出して読む長文音読である。STEP03 は、会話の流れに沿って、指定された人物の台詞を発話するロールプレイである。

## 3. 学習時間

このプログラムでは、受講生の学習履歴(学習ユニット、学習時間、進捗状況、練習回数、回答記録等)の詳細が記録される。【表1】は、受講生のリスニング・スピーキング、リーディング・ライティングの累計学習時間、その合計時間である。授業では、学習時間に制限や強制等は設けていない。リーディング・ライティングの学習は、授業内外の時間を利用し、受講生の裁量で取り組んだものである。1ユニットの学習所要時間はおよそ40分が目安とされている。【表1】

の学習時間は、授業期間に受講生がパソコンに向かって学習を進めた正味時間の累計である。

【表1】学習履歴：学習時間の合計

学生番号 (ST No.)	リスニング・ スピーキング 累計学習時間	リーディング・ ライティング累 計学習時間	合計時間
1	1:54:07	0:54:49	2:48:56
2	1:54:20	2:10:25	4:04:45
3	2:47:54	1:17:52	4:05:46
4	2:40:14	1:21:57	4:02:11
5	4:24:11	2:14:21	6:38:32
6	3:03:25	1:16:39	4:20:04
7	3:34:31	2:44:52	6:19:23
8	5:15:19	1:16:01	6:31:20
9	5:12:26	1:24:02	6:36:28
10	3:59:27	1:58:35	5:58:02
11	7:18:05	2:10:12	9:28:17
12	5:12:33	1:15:14	6:27:47
13	3:53:55	2:22:05	6:16:00
14	5:17:31	1:33:40	6:51:11
15	5:29:19	1:30:19	6:59:38
16	3:04:18	3:54:15	6:58:33
17	3:08:30	2:00:45	5:09:15
18	6:20:08	3:11:12	9:31:20
19	4:10:59	1:39:57	5:50:56
20	2:01:16	1:37:19	3:38:35
21	3:14:39	1:49:44	5:04:23
22	10:18:11	3:12:06	13:30:17
23	3:53:48	3:45:28	7:39:16
24	3:05:05	1:28:40	4:33:45
総計	101:14:11	48:10:29	149:24:40
平均	4:13:05	2:00:26	6:13:32

## Ⅲ 研究の方法

本実践では、以下の①～⑦のような学習への取り組みや学習過程が観察されたので、これらの観点を基軸として具体的にどのような学習行動、思考過程、起こった結果、省察等が見られるかを学習記録から分析する。そして、本実践のe-Learningが英語学習を進める上でどのような教育的効果をもたらしたかを考察する。尚、①～⑦には、関連するキーワードを設け、それらを拠り所として学習記録の記述を分析する。

- ① 学習目標の設定にあたり自分の英語の弱点や問題点を把握する。【弱点】【問題点】【困難】【気づき】【発見】
- ② 弱点・問題点克服のために必要な学習事項を具体的に示す。【必要】【重要】【分析】【具体化】
- ③ ②を基に学習目標・課題を設定する。【目標】



【課題】 【改善】

- ④ 目標・課題の達成に必要な学習方略を考える。  
【方略】 【手順】 【工夫】 【意識学習】
- ⑤ 学習成果や上達を実感する。【上達】 【成功】  
【失敗】 【理解】 【学び】
- ⑥ 新たなチャレンジや目標が生まれ学習意欲が向上する。  
【動機】 【意欲】 【チャレンジ】 【不安】  
【自信】
- ⑦ 省察により学習を評価する。  
【評価】 【反省】 【感想】 【姿勢の変化】

IV 教育的効果の考察

1. 英語の弱点・問題点を発見する

本章では、本実践の e-Learning が受講生にどのような英語学習上の教育的効果をもたらしたかを考察する。最初に、練習を通じて、受講生が自分に不足している英語のスキルは何かを考えたり、弱点を発見したりしたことに着目する。学習記録には、学習過程で得た様々な発見や気づきが記述されているので、以下では、事例と共に、その思考過程を探っていく。

(4.1)には、文を区切って発音することが苦手であること、アクセントの問題に気づいたことが記述されている。(4.2)からは、区切りの位置に関する疑問や滑らかに発音することの難しさを感じたことが分かる。

- (4.1) 文章をまとめると毎に区切るのが苦手なことが分かった。アクセントが曖昧、語尾が上がりがちになる。(ST9) 【弱点】 【問題点】 【気づき】
- (4.2) 一息でどれくらい言えばいいのか、区切りが分かりにくかった。長い単語が連なっていて、滑らかに言うのが難しかった。(ST17) 【困難】

(4.3)には、話す速さの問題に気づき、意識して練習したことが記されている。(4.4)からは、録音を聞いて、抑揚ができていながらも、実際にはできていないことに気づき、改善策を考えた様子が窺える。

- (4.3) 英語のスピードについていくのが苦手だということに気づいたので、様々な速さで黙読した。オーバーラッピングでは、「とにかく止まらないように」ということを意識して練習した。(ST23) 【弱点】 【気づき】 【意識学習】
- (4.4) 自分では抑揚をつけていながらも、実際に音声聞いてみると、平坦な英文が聞こえてきて、ある程度極端に抑揚をつけてみてもいいのと考えた。(ST6) 【問題点】 【気づき】 【改善】

練習方法への気づきも見られる。(4.5)は、録音を聞いて練習するだけでは不十分という考えに至ったこと

が分かる。(4.6)は、オーバーラッピングの有用性に関する気づきである。

- (4.5) 自分が話しているのが聞き取り易いのかどうかは、自分の録音を聞いているだけではならず、皆の前で話すのは、別だと思った。【気づき】
- (4.6) オーバーラッピングをすると、本文全体の読むペースが分かるので、よりネイティブに近づいた話し方ができると思った。(ST11) 【気づき】

以上、受講生は、学習過程で自分の英語の弱点・問題点、練習方法の有用性等に至るまでの様々な気づきや発見をしたことが明らかになった。よって、自分の英語の弱点、問題点等の把握が促進されたことは、教育的効果の1つと考えられる。

2. 必要な学習を洗い出す

前節では受講生の様々な気づきや発見について考察したが、それらは、自分に今後どのような学習や練習が必要であるかを洗い出す引き金となったと考えられる。以下では、受講生自分に必要な事柄を具体化していることを示す事例を見ていく。

(4.7)からは、日々の練習の必要性、(4.8)からは、抑揚をつける練習の必要性、(4.9)からは、反復練習の必要性を感じていること分かる。

- (4.7) the や a が聞き取れないから、日々の練習が必要だと思った。(ST19) 【弱点】 【必要】
- (4.8) 抑揚をつけるのは難しかったので、もう少し練習が必要。(ST11) 【弱点】 【必要】
- (4.9) スピーキングでは、どれだけ真似しても、ネイティブのイントネーション、リズムと比べたら、まだまだなので、反復練習が必要と感じた。(ST5) 【弱点】 【必要】

(4.10)では、文の区切りを意識した話し方の必要性を認識したこと、(4.11)は、呼吸のタイミングを覚えることの必要性、(4.12)は、文章を繰り返し練習する必要性を感じている様子を表している。(4.13)は、アイコンタクトの大切さに触れている。

- (4.10) オーバーラッピングで行き詰まる箇所があった。1人が話しているだけの文なので、区切りを意識して話さなければならないと思った。(ST13) 【問題点】 【必要】 【意識学習】
- (4.11) 呼吸のタイミングに慣れる (ST23) 【課題】
- (4.12) 文章の前半分はある程度見ないでも言えるが、後半部分はまだ詰まってしまう部分もある。繰り返し練習する必要がある。(ST1) 【分析】 【必要】

(4.13) 話す時に相手がいるのであれば、目を見て話すことも重要だろうと思った。(ST1) 【必要】

以上、受講生がどのような練習が自分に必要かを明確に示したことが明らかになった。どの事例も自分の弱点や問題点の把握を根拠として引き出されている。よって、自分にどのような練習が必要であるかを考え出すきっかけとなり、自分に必要な学習内容の具体化が促進されたことが、教育的効果として考えられる。

### 3. 学習目標・課題を設定する

自分の弱点や問題点を把握した受講生は、自分に必要な学習（練習）を明確にし、次にそれを新たな目標や課題として設定した。また、1つの目標を達成すると、次の目標を設定した。以下では、事例を基に、受講生がどのように目標や課題を設定したかを探る。

(4.14)では、「単語と単語の繋がり」による音の変化に着目し、なめらかに発音することを目標としている。ここで言う「繋がり」とは、英語のリンキング(linking)、リダクション(reduction)、フラッピング(flapping)等を指しており、英語の発音をマスターする上で重要な点である。

(4.14) 単語と単語の繋がりを意識しながら聞き、スピーキングで真似をできるようにする。録音された自分の声をモデルの声と良く聞き比べる。(ST2) 【目標】 【意識学習】 【方略】

(4.15)では、自分の発音の弱点を診断し、次の目標として高低を意識して話すことを掲げている。

(4.15) 自分の発音を聞いてみると、イントネーションが弱いので、次回の目標は、高低を意識しながら話すことにしたいと思う。(ST11) 【弱点】 【発見】 【目標】 【意識学習】

(4.16)では、スピーキング練習において、モデルとの一致率 8割と具体的な数値で目標を掲げている。

(4.17)では、英会話表現の運用力を上げることや時制の使い方を学ぶこと課題としている。

(4.16) スピーキングでは、声の高さとリズムが 8割一致できるようにする。(ST8) 【目標】

(4.17) 特定の場面で使われる文法や会話表現に聞き慣れ、自分のものにして簡単な表現は使えるようにする。時制に気をつけて、今後の英語学習でも使えるようにする。(ST14) 【課題】 【目標】

目標は、会話の方法にも及んでいる。(4.18)では、声色を変えた会話を目標としている。(4.19)では、状

況や場面に合った話し方をめざしている。

(4.18) 対話になっているので、(二人の)話し方を変えて会話らしいスピーキングをする。(ST7) 【必要】 【工夫】 【目標】

(4.19) 発表の時は、Tom の病人らしさを出すために、声の調子を暗くしたり、聞いている人に伝わるようにしたい。(ST3) 【目標】 【工夫】

(4.20) (4.21)は、英文に感情を込めたり、自己の表現で話せることをめざす事例である。

(4.20) 感情を込めて言えるようにする。(ST23) 【課題】

(4.21) 自己の表現で話せるようになる。抑揚、表情、身振り等のあるスピーチを目指す。(ST1) 【目標】

(4.22)は、学習過程の省察で、目標を見つけることができたことを評価している。

(4.22) 改めて、(プログラムで)自分の発音を聞き直せるのは良いと思った。発音しているときは気づけなかった発音の間違いを見つけることができたり、次からは、r と l の発音の区別に気をつけようなど目標を見つけることができた。(ST7) 【発見】 【評価】 【目標】

以上から、受講生は自分の弱点や問題点を改善するため、自分の目標や課題をきめ細かに設定していることが明らかになった。英語の発音、文法、表現等の細かな点に注意を払った目標、コミュニケーションに着目した課題も見られた。自分の英語力(スキル)や学習進捗を勘案し、無理のない目標を立てて取り組む姿勢が窺われた。よって、受講生が自分に適したきめ細かな目標・課題を設定することを促したことも教育的効果の1つであると考えられる。

### 4. 課題達成のための方略を考える

自分の目標・課題を設定した受講生は、次のステップとしてそれらを達成するために、様々な手順や方法を考えた。ここでは、受講生がどのような学習方法や学習方略を見出し、実践したかを事例と共に分析する。

(4.23)は、リスニングにおいて、音声を聞いて意味を考え、スクリプトで確認して全体を理解する手順をとっている。着実な方法であると考えられる。(4.24)では、書くという方略を用いて、細かい点の意識化に成功した事例である。

(4.23) 音声のみ聞きながら意味を考える。分からない



ところはスクリプトで確認。最後には全部理解できるようにする。(ST6) 【方略】 【目標】

(4.24) 一度文字で書いてみることによって、細かい形容詞、冠詞まで意識することができた。(ST2) 【方略】 【上達】

(4.25)は、聴解の練習の手順を示している。最初から英文を見ないことがこの受講生の方略だと思われる。

(4.25) 英文と訳を見ないで1回聞く→訳を見て分からないところを想像してもう一度聞く→どうしても分からないところを英文を見ながら確認して、その文を言って練習する。(ST2) 【手順】 【方略】

(4.26)では、ある程度学習した後、日本語を見ながら音声を聞いて、英語を想像するという独自の方法で取り組んだ事例である。(4.25)とは異なる方法である。

(4.26) 日本語を見ながら、次にどのような英語が読まれるのか想像しながら進めることができた。口に出した方が頭に残った。(ST12) 【方略】

(4.27)は、文章の暗記の着実な手順を提示している。

(4.27) お手本を聞いて、発音を近づける→意味のかたまりごとに覚える→全体の流れをくんで、見ないで言えるようにする→日本語訳を見て、英文が思い浮かぶようにする。(ST10) 【手順】 【方略】

(4.28) では、伝えたいことを意識することで、パフォーマンスの向上をめざしている。(4.29)では、抑揚を意識した練習をしたことが窺える。

(4.28) 動物園の紹介ということだったので、何を伝えたいのかを意識して話した。(ST15) 【意識学習】

(4.29) いつも暗い棒読みになってしまうので、実際の会話のように明るく、抑揚をつけることを意識して取り組んだ。(ST6) 【方略】

以上から、受講生は自分の目標や課題を達成するため、練習方法、工夫、手順等をきめ細かに考えて学習に取り組んだことが明らかになった。そして、受講生が編み出した学習方法や学習方略の多くは、自分の学習や弱点を把握し、それを克服するために考え出された(独自の)のストラテジーであると言える。ここで紹介した事例の多くは、原因とその対策、方策、時には、その結果までが記述されており、より主体性をも

って改善・上達に取り組んだ姿勢も窺える。よって、自分で自分に適したきめ細かな学習方略を考え出すのを促したことも教育的効果の1つであると考えられる。その方略が妥当であったかどうかは、その後の取り組みで確認され、失敗したときは新たな方法を考えている。

## 5. 進歩を実感する

ここでは、学習の過程で受講生がどのように上達、進歩、学習成果等を実感したかを探る。学習成果があったかどうかを認識することは、学習方法の妥当性、評価、学習意欲等に関わる重要なことだと考えられる。

(4.30)では、英文を見なくても聞き取れるようになったこと、(4.31)では、倍速で聞くという方法で練習したら、聞こえやすくなったこと、(4.32)では、聞き取り力が伸びたと実感したことが記述されている。どの事例も、それぞれの目的達成のために学習方法を考えて取り組んだ成果と考えられる。方略も伴っている。

(4.30) 最初に聞き取れなかった単語が文章を覚えることで、英文を見なくても聞き取れるようになった。(ST1) 【方略】 【上達】

(4.31) 2.0倍速で聞いた後、1.0倍速(通常の話)で聞くと、聞こえやすくなったなど感じた。(ST18) 【方略】 【上達】

(4.32) 台詞を見なくても何を話しているのか理解するように画面は見ないようにした。はじめより着実に力が付いたことを実感。(ST21) 【方略】 【上達】

(4.33)では、Step 1 の話すのが上達したこと、(4.34)では、発音が上達したことが記されている。

(4.33) 最初の頃に比べて、Step 1 がスムーズにできるようになったと思う。(ST2) 【上達】

(4.34) 聞いて発音する練習で前は少し遅れ気味だったが、今日はなんとかついていけるようになった。(ST3) 【上達】

(4.35)では、自分なりの表現方法で話せるようになったことが上達と考えられる。(4.36)では、英会話表現の実際の使い方等を学んだこと、(4.37)では、会話における様々な表現を学んだこと、時制・アスペクト表現の使い方を学んだことが示されている。

(4.35) お手本を参考にしながら、自分なりに強調する部分や身振り等を考えることができた。(ST1) 【成果】 【上達】

(4.36) 買い物をしている場面を聞いて、「It's nice on you.」など、今までの英語学習で習ってきた独

特の会話表現がところどころに出てきて、自然な会話の中では、このタイミングで使うのかということが分かった。(ST14) 【理解】

(4.37) 似たような会話内容でも様々な表現が使われていて、勉強になった。時制も現在完了や現在進行形などが入り乱れていて、ここはこの時制になるのかと思った。(ST14) 【学び】 【理解】

(4.38)は、自分の練習へのアプローチの方法を振り返り、その効果や成果を省察している。また、本人なりに練習に関する新しい知見も得ている。

(4.38) 場面理解、語調に注目して聞き、それをスピーキング練習でも留意して練習を行うことで、より正確に聞き取ることができた。「会話の文章においては、スピーキングの点も注目するとリスニング力UPへの近道になりうる」と考えた。(ST4) 【方略】 【成功】 【上達】

以上から、受講生が様々な学習の成果を実感したことが明らかになった。受講生は目標や課題を明確にして、それを意識して練習することで、進捗状況、上達、学習成果等をより具体的に感じることができたのではないかと考えられる。特に、自分の考えた学習方略が有効であったかどうかを考える機会にもなったと思われる。よって、これまでの一連の学習過程は、失敗も含め学習成果を実感するのに役割を果たしたのではないかと考えられる。成果は学習意欲の向上や学習評価とも深く関わっており、以下でさらに考察を進める

## 6. 学習意欲が高まる

ここでは、この授業に受講生がどのような姿勢で取り組んだかを探る。特に上達や進歩の成功体験が学習意欲の向上につながるかどうか、また、学習目標や練習方法を自分で考え、決めて学習に取り組むことが、主体的な学習への関わりを促進するかどうかを学習記録の分析をもとに考察する。

(4.39)では、発音の上達により、今後も練習に励みたい旨が記されている。ここでは、1つのことの達成が次の学習への動機づけとなっているのではないか。

(4.39) 前回やったときよりきれいな発音に近づけた。これからもしっかり練習して、もっと自然に発音できるまで頑張りたい。(ST20) 【上達】 【意欲】

(4.40)では、意識して行えなかった発音練習を次の目標にし、「次は完璧に！」と学習意欲を見せている。(4.41)では、「r」と「l」の発音の区別を次回の改善点として掲げ、積極的な学習姿勢が示している。どちら

の事例も受講生が自分で設定した改善目標である。

(4.40) 音の繋がりに関してはうまくできたと思うが、音の強弱・高さを気にして行えなかったと思う。次は完璧に! (ST2) 【成功】 【意欲】

(4.41) 次は、「r」と「l」の発音に注目したい。まだ、区別ができていないので、次回の改善点にしたい。(ST2) 【問題点】 【目標】 【改善】

(4.42)では、学習(練習)の進歩を実感したことにより、さらに上達するための新たな挑戦が生まれたと明言している。成功がチャレンジ精神を刺激している。

(4.42) 以前より早く文章を覚えることも、スピードについていくこともできるようになっていた。そのため、速いスピードで見ずに言えるかなど、挑戦が生まれた。(ST19) 【上達】 【チャレンジ】 【意欲】

(4.43)は、レシテーションの発表において、発音等に留意して丁寧やる意思を表している。恥ずかしさは払拭できずとも、前向きな姿勢を見せている。達成感だけが動機を高める要素とは限らないことが分かる。

(4.43) 表現力の面は少し難しかった。皆の前でやる時には、少し恥ずかしいかもしれないけれど、リエゾン、アクセントを含め丁寧にやろうと思う。また、焦って速くならないように注意したい。(ST2) 【困難】 【不安】 【意欲】

(4.44)では、自分の学習を分析し、間違いを意識して練習出来た点を評価している。そして、意識が及ばなかったことにより間違えたことに気づき、今後の練習では気をつけたいという学習への前向きな姿勢や学習意欲を示している。成功だけでなく、失敗(不足)も学習の動機づけに繋がっていると思われる。

(4.44) 前回の間違いを意識して練習することができた。逆に意識していないところで間違えないように気をつけたい。(ST3) 【意識学習】 【方略】

(4.45)では、プログラムの倍速機能を活用した練習の省察である。自分に合う速さを探すこと、自宅でも練習しようというところに学習意欲が感じられる。

(4.45) 1.0、1.2、1.4倍のスピードで話す。スピードで自分に合うものを探してみた。どのスピードで発表しようか迷っている。自分の言いやすいスピードを探し、自宅でも練習しようと思った。(ST19) 【方略】 【意欲】



(4.46)では、自分で考えた方法を試し、成功したので、それを継続していききたいという向上心が窺える。

(4.46) 意外とうまくいったと思う。話し手の気持ちになって話す手本と近くなったので、これからも意識していききたいと思う。(ST7) 【成功】  
【方略】 【意欲】

以上から、授業において、受講生が前向きに取り組む姿勢、意欲的に学習する姿、更なる上達をめざして目標を設定する様子等が明らかになった。うまくいかなかったことが学習の動機づけに繋がっていると思われる事例も見られ、成功や達成感だけが、動機を高める要素とは言えないことも分かった。受講生は、自分で考えたストラテジーで学習を行い、その上達・進歩・失敗等を経験することが、学習意欲の向上や動機づけに役割を果たしているのではないかと考えられる。

## 7. 省察により学習を評価する

最後に、受講生の省察や授業の感想等からこの実践の教育的効果を探る。(4.47)(4.48)では、目的を意識して学習することの効果に言及している。これらから、目標を設定して取り組むことが学習効果を上げるのに大切だと受講生が気づいたことを示唆している。

(4.47) やっぱり意識してすると、学習ができてい  
感じた。リスニングは頭の中に英語を思い浮かべてやった。スピーキングは目標通りにやれた。(ST12) 【上達】 【成功】 【意識学習】

(4.48) 自分なりに目的を決めてそれを意識してやると、いつもよりしっかりできた。(ST2) 【成功】  
【意識学習】

(4.49)(4.50)は、どちらも成功しなかった事例である。受講生はできたこと同様、できなかったことも明確に把握したと言える。

(4.49) お手本が早口に感じたので、慣れるまでやってみた。一文が長いと発音がおろそかになってしま  
って大変だった。(ST15) 【失敗】

(4.50) スピーキングは、あまりうまくいかなかった。  
やっぱり難しい。(ST8) 【失敗】

(4.51)は、プログラムの機能を使いこなせなかったことを反省点としている。(4.52)では、聞き手を意識した話し方が出来なかったことを反省点としている。

(4.51) 反省点としては、リスニングで、1.5 倍速、2.0 倍速の機能を使いこなせなかったことである。

## (ST18) 【反省】

(4.52) スピーキングで、発表でなくても聞き手を意識して話すことが出来なかったことが反省点である。(ST18) 【反省】

(4.53)は、プログラムの録音機能を活用した学習の有用性を評価し、練習に活用したことが記されている。

(4.53) e-Learning を始めてすぐは、パソコンに向かって話すのも、自分の録音した声を聞くのも何か恥ずかしかったけれど、強弱やイントネーションの切れ目など直すべきところに気づくのに最高の機能だということが分かったので、途中からは、何度も自分の声を聞き直すようになった。(ST18) 【感想】 【評価】 【姿勢の変化】

(4.54)は、英語の苦手意識を払拭して、自信を持つことが課題だと締め括っている。

(4.54) レシテーションでは、英語に対する「苦手意識」が払拭されていないということを痛感した。他の人に聞いてもらうとなると、とたんに緊張して、覚えていたことがほとんど消えてしまった。何度も練習したと自負しているので、やはり、「苦手意識」があったせいだと思う。自分の英語に自信を持てるようにすることが、今後の課題だ。(ST23) 【気づき】 【評価】 【自信】  
【課題】

以上、受講生は省察を通じて、自分の学習を評価し、学習への様々な気づきや発見をしたことが分かった。本実践では、目標や目的を持って取り組むことが学習効果を上げるのに大切であること、自分のできたこと、できなかったこと、反省点等を明確に把握したこと、プログラムの有用な活用方法を理解したこと、苦手意識の払拭や自信を持つことを今後の課題としたこと等の事例が見られた。

これらの事例は、学習目標や改善点等を明確にし、自分でその方策を考え、それを意識して練習すると、漫然と取り組むよりもきちんと学習できることを受講生自信が感じたことを示唆している。また、成功ばかりではなく、失敗も貴重な体験の1つで、反省はむしろ次へのステップを後押しするのではないかと。失敗が著しく意欲を低下し、学習を阻害するような事例はここでは見られなかった。

以上、省察は、上達や進歩をめざす上で大切な学習活動の1つであると言える。本実践では、毎回学習記録を書くことで、受講生に省察を促したことも教育的効果の一部ではないかと考えている。

## V 結 論

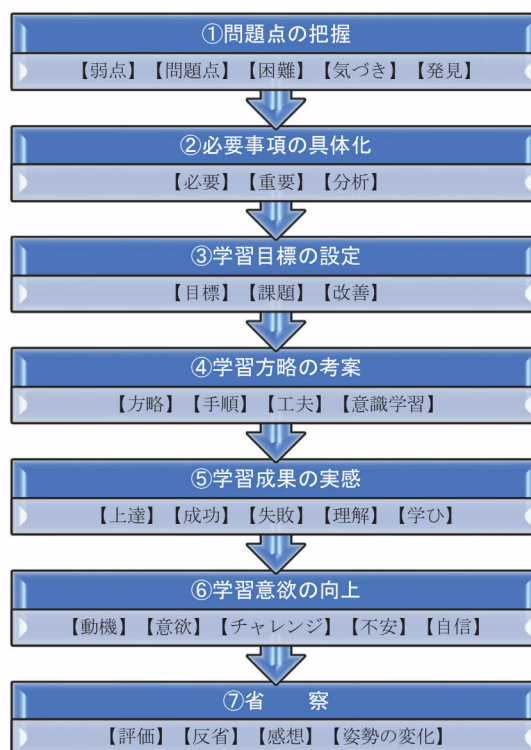
本実践では、受講生が自分に適した学習目標を立てて英語 e-Learning を行うことを主眼とした。学習記録の分析の結果から、これが受講生に様々な学習活動を促し、学習の成果に繋がったことが明らかになった。

授業では、目標を立てるために受講生はその時点での自分の英語の弱点や問題点について考え、自分に不足している英語のスキルは何かを明確にした。弱点・問題点を克服するために必要な学習内容を具体化した。必要事項を学習目標・課題として設定した。次に、目標・課題を達成するために有効な学習方略を考えた。そして、練習や学習の成果を実感した。成果（成功や失敗）の実感は学習意欲の向上や学習動機を高めることに繋がった。省察により自分の学習を評価し、新たな目標・課題を提示した。これらの一連の過程は、目標達成という大きな課題の下、連鎖的に結び付いており、受講生は主体的に e-Learning に関わり、能動的に学習を進めたと考えられる。【図 1】はこれらの学習活動の流れを図にまとめたものである。上段は、受講生が行った主な学習活動（行動・思考・感情・結果等を含む）で、下段はそれに関連するキーワードである。

この授業を教育的効果の観点から考察すると、以下のような点から受講生を支援したことが示唆される。①自分の英語の弱点を発見し、問題点を明確にする契機となった。②英語の上達に必要な学習内容を洗い出し、具体的に提示することを促した。③自分に適した学習目標・課題を設定する手助けとなった。④目標達成のための学習方略を考える後押しとなった。⑤上達や学習成果を把握・実感するのに役立った。⑥学習意欲を高めることに繋がった。⑦学習記録が省察を深めると機会になった。これらは、この授業が受講生の英語学習の推進に果たした役割と考えられる。

## VI 展 望

本実践では、受講生は自己診断、学習目標の設定、学習方略の決定、達成度の評価、省察までの全過程を自分の判断に基づいて遂行した。すなわち、自己の学びに責任をもって学習に取り組んだと言える。これが学習への主体的な関わり、能動的な活動、積極的な姿勢を促したと考えられる。自己の学びに責任を持つことは、より深い AL 学習を実現する上でも重要である（関田・三津村, 2015）。本実践で見られた学習活動の連鎖は、自己の学びに責任を持って取り組むことにより生み出されたと言えよう。しかし、これは本実践のみから得られた知見であり、今後、さらなる実践と検証を重ね精緻化していく必要がある。



【図 1】 学習の流れと連鎖

## 謝 辞

英語サポートセンターの研究補佐員の方々には、何度も授業に足をお運びいただき、機器のトラブルへの対応やプログラムの円滑な使用に関してご支援いただきました。また、本稿をまとめるにあたっては、査読者の方より、有益なご指摘をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- アルク (2016). 「ALC NetAcademy NEXT」総合英語トレーニングコース.
- アルク (2016). 『ALC NetAcademy NEXT 総合英語トレーニング 初級コースコースガイド Ver. 1.0』, 2016年2月1日発行
- 稲葉みどり(2017). 「英語 Active e-Learning の実践ー学習へのアプローチの分析ー」『教養と教育』 17, 5-15.
- 関田一彦・三津村正和(2015). 「意味のある学習を意識した授業デザインー教師としての素養を学び磨くというストーリー」『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を深化させるためにー』 松下佳代編著, 勁草書房, 189-214.

(2017年11月16日受理)